風の強い日

日下部　メイコ

びょうびょうと風が吹いていた。
私は窓の外を見ながら、プリントをホチキスでとめていく。校内放送ではついさっき、電車が止まったと伝えていた。これは春一番かもしれない。
ぱちんぱちんと単調な音が続いて、ときたまサッシの隙間風が鳴る。
唐突に、それ以外の音がはさまれた。
「タニセン、はんこくれー」
がらがらと勢いよく戸が開いて、男子が入ってきた。佐藤くんだ。四月から、同じクラスになる。
佐藤くんは掃除場所のファイルを持っていた。もう掃除は終わったのだろうか。
私に気づいた佐藤くんは不思議そうな顔をして声をかけてきた。
「タニセンは？」
「さっき別な先生に呼ばれて出てったよ。すぐ帰ってくると思うけど」
「ふーん……。なにやってんの？」
「プリントとめてる」
言ってしまってから後悔した。見ればわかることだ。せっかくクラスメイト（予定）として気をつかってくれているというのに。もっと気の利いた言い回しをすればいいものを。
「ふーん。タニセンの？」
あ、続いた。
「う、うん。迎え来るまで暇だろうからって」
「迎え？」
「あ、電車止まっちゃったから」
「電車通学なんだ」
「うん。結構近いとこだけど」
先生が帰ってくるまで、どうかこのまま途切れませんように。
「へえ、どこのほう？」
知っていますように、と祈るような気持ちで言った。
「柳沼（ぬま）……ってわかる？」
恐る恐る伺うと、佐藤くんは眉を下げてなんともいえない表情になっていた。
「うーん、ごめん。おれ中佐都（なかさと）のほうだからなー」
まったく逆方向の地名が上がった。中佐都なんて生まれてこの方、片手で足りるほどしか行ったことはない。地元トークは無理だ。
ふつりと会話が途切れた。風はやまない。外から、途切れ途切れに悲鳴が聞こえてくる。

なんでもいいから会話の糸口をつかまなければ。「風が強いね」？　うん、無難だ。よし。
「か……」
びゅう、とひときわ強い風が吹いて、窓がみしみしときしんだ。ほうぼうから悲鳴が聞こえてくる。
タイミングを逃してしまった。出鼻をくじかれた気分だ。中途半端に開いた口が悲しい。さあ、ここからどうやって会話を再開させたものか。
と、佐藤くんがつぶやいた。「あ」
ほぼ同時くらいに、目の端を白いものが横切った。窓の外だ。
また、強い風が吹いた。窓ガラスがたわんで、隙間風の悲鳴が上がる。そうしてひらひらと、窓の外を白いものは飛んでいく。
「ふっかけ」
「ふっかけ」
そうつぶやいたのは私だけではなかった。反射的に横を向くと、佐藤くんも私のほうを見ていた。そしてどちらともなくまた窓の外に目を向ける。
和紙のような雲が流れていた。薄青に晴れた空。弱い日差しに照らされて、山から飛ばされてきた雪がきらきら光った。
「風、強いなー」
「うん。まだ、雪が残ってんのかな」
「そうかもな」
「暖冬って言ってたのにね」
「あったかいっつっても冬は冬だな」
なんだか会話は再開した。気象庁ありがとう。
ふと見ると、佐藤くんは笑っていた。ものすごくおもしろいことでもあったかのような顔だった。
風が吹いて、また雪がちらつく。
「なんか、」
「なんか？」
佐藤くんの表情が気になって、つぶやきをおうむ返しにくり返した。
「いいな、やっぱ」
佐藤くんはうれしそうに楽しそうに笑った。
「『ふっかけ』ってさ、方言なんだよ」
知ってた？　と佐藤くんは言った。私は首を振った。知らなかった。初耳だ。
「おれ、小四の頃から高校上がるまで神奈川のほうに住んでたんだ」
へえ、と息だけで相槌を打った。かながわ、と口の中で声を出す。関東。首都圏だ。
「それで、あっちでは通じないんだ、『ふっかけ』って」
それはまた、衝撃的だ。佐藤くんの心中お察しする。
「でも今、ふつうに『ふっかけ』って言っただろ。なんかそれが、ああ帰ってきたなーって感じてさ」

佐藤くんは懐かしそうに目を細めていた。
「あっちだと、『かざはな』って言うんだって」
かざはな。どんな文字を書くのだろう。考えていると、それを察したのか佐藤くんは、
「吹く『風』に咲く花の『花』で、『風花』」
指で空中に書いて見せてくれた。『花』の書き順が違ったが、そこは軽く目をつぶる。
「風流だよな、なんか」
そしてまた、楽しそうに笑った。
そうだね、と私も笑った。
窓の外はまだ、風が吹いていた。さらってきた雪だけでなく校庭の砂も巻き上げて飛んでいく。そのたび、悲鳴が上がる。
私の名前が風花（ふうか）だと言ったら、佐藤くんはどんな反応をするだろう。風流だと言ってくれるだろうか。
空には、風花が舞っていた。